

佳作

「健康だからこそ検診を」

神山 健さん

とある病院、私はこの5階へ週に1度程度通う。今日は少し時間がある。少し長く居ようと思う。いつものことだが清潔で静かな廊下、患者さんを見かけることはほとんどない。ここは長期療養を目的とした病棟。私の母は4年間お世話になっている。

私が世帯を持ち、甲府市内で暮らすようになってからは、母は実家で1人暮らしをしていた。父と商店を営み、8人の大家族だった時代もあったが、少しずつ家族が減っていき、4年前、母は72歳になっていた。

私の記憶する母はとても健康的だ。そして我慢強い。家業は朝8時から夜9時まで営業、休日は1ヶ月に1日程度。家事もこなし、人生の全てを家族の為に費やしているようで、不平不満を聞いたことがない。「昭和の母」と一言にしてしまえば終わりだが、現代人の我々には到底真似できない。ではなぜ母はストレスを溜めない健康な姿に見えたのだろうか。

母は毎朝3時半に起きていた。友人と一緒に「早起き会」と称してジョギングや散歩を楽しんでいたのだ。春夏の早朝は空気が清々しく、秋冬はまだまだ暗闇。しかし1年を通し、その日が始まろうとするほんの少し前の時間を冒険しているんだそうだ。タイムリミットは朝6時。家族が起きる前の2時間をだれにも邪魔されず、好きなように過ごしていた。これが母流の健康法だった。

父を亡くし、商店も閉めてしまった60代は、母の第2の人生だった。親戚の食堂を手伝い、私が出勤する車に乗って甲府市内に通った。人生初めての給料をもらった時、ハンバーガーを買って食べたと話す表情が楽しそうだったことをよく覚えている。そんな折、私も会勤めが板につき、それまで母と同居していたのをやめ、甲府市内に家を持った。母を1人暮らしにしまったのだ。

私に映る母は健康だった。弱音を言わず、私には好きなようにしなさいと

だけ言う母だ。だから母はいつまでも健康だと思っていた。忙しい家業、楽しむ早起き会、60歳を過ぎてからの新生活・通い勤め。いくつかの病気はしたが、私には健康だと、いやそうでないと困る。健康であり続けてほしいと勝手に思い込んでいたのだ。そこへ飛び込んで来たあの一報だった。

寒い日が続く冬、実家は室内も冷え込む。偶然に訪れた親戚が倒れている母を発見した。すぐに救急病院に運んでもらい、私も駆けつけた。病名は「くも膜下出血」。状態は悪く、何日も保たないと先生は言う。姉から聞いたが、数日前から頭痛があり仕事を休んでいたそうだ。症状はあったのだ。しかし、本人も周りの人も気づくことができなかった。健康な母のことだから少し休めば回復すると思っていたのだ。

母の寿命はここまではなかったようだ。今も病院のベッドで寝ている。目も開けている。しかし、反応は一切しない。静かな病棟で母もただベッドで横になっている。

それから4年、1週間に一度は母の顔を見に来るようにしている。いや、今は2週間行かない時もある。これについては自分の愛情の無さが嫌になる。また姉のように、母に大きな声で話しかけることが恥ずかしくて今もできない。つくづく息子とはダメなものだと自分に飽きれてしまう。

母の目を見つめていつも思う。健康と思い込んでしまっていたが、しっかり定期健康診断を受けていたのだろうか、受けさせてあげたのだろうか。

私は会社勤め。1年に一度、人間ドックの通達が来る。総務が口頭で健康診断の日程を聞いてくれるので忘れることはない。しかし母はどうだったのだろうか。長い間自営業だったこともあり、健康チェックというものを万全にしていなかったのではなかろうか。もしあの寒い冬に定期健康診断を受けっていたら、くも膜下出血を免れていたかもしれない。もし定期健康診断を受け続けていたら、今でも母は健康な人だと思い込んでいられたかもしれない。それが悔しくてたまらない。

病気は起きてからでは取り返しがつかない。病気に罹らないよう健康に気を使い、定期的な診断を受けるべきだとあらためて思う。人間ドックの通達をくれる会社に感謝するとともに、この機会を大切にしていきたいと思う。

母の声を聞いたのはいつが最後だったのだろうか。今日は心で会話をした

い。「今回もメタボの診断だったよ。でも脳は問題なかったよ」。